

第一部 過去と未来と

侯爵邸の前に大型のエアカーが停まった。

ドルス市では珍しいガスタービン・エンジンの響きに聴覚を刺激され、フアーリアはデッキキエアからほつそりした上体を起こした。淡い空色の瞳を巡らせたはずみに、読んでいた古い本が膝の上から滑り落ちる。

夏のドルスは海から吹き寄せる冷涼な大気に包まれ、冬は海洋性気候のために緯度の割には気温が下がらない。メルティアでも最も過こしやすい気候に恵まれたのがスルフエイク州である。ただし、夏の日差しはそれなりに強く、フアーリアは色の濃いサングラスを手放さない。

五七三年一五月。真冬と言っていい。それでも淡い空色の瞳は薄いサングラスで守られている。フアーリアは間もなく一二歳の誕生日を迎える。

その視線の先に小型のエア・カー。侯爵邸に続く小径に差し掛かるあたりに止まる。連邦空軍の哨所があるはず。どういふものか、きょうは誰も詰めていないようだ。

「……？」

エアカーのドアが開き、二人の男女が降り立った。女の方は遠目にも小柄で、華奢、身体をどこか悪くしているらしく、左手に杖をついている。男の方が心配げにその腕を支えながら、さして長くない、門に繋がる小径をゆつくりと侯爵邸に歩み寄ってくる。

テーブルの上の本の堆積に、床から拾い上げた本をそっと重ねる。フアーリアは、デッキキエアを滑り降りた。客に先んじて迎えに出るのがフアーリアの幼い頃からの習慣である。

「お客さまね。お父さまにご予約があつて……」

コンピュータ・コンプレクスが、忠実な執事の言葉を模して返答する。フアーリアの綺麗なプラチナ色の眉がわずかに尖った。面会を求められれば、父はたいてい気軽に会う。リアー王朝下の大貴族への面会には、何週間も前からのアポイントメントと、何人もの仲介者への巨額な謝礼がまず前提だった。父は、そんな仰々しさを嫌う。

もともと、スルフエイク州の人々も心得ている。利権を求めての面会にラルクは応じない。応じても、冷淡にあしらわれるだけである。侯爵は、ダウンタウンにお出かけです。何か、事故が起こったとのことでごさいます……あと一時間はお戻りになりません。

「でも、現実にお客さまが見えているわ。あなたに見えて？」

「はい」

「わたしが迎えに出ます。お父さまにはそうお伝えしてね」

「承りました」

スカイ・ブルーの視線を自分の服装に走らせ、ちよつと不満げに唇を歪める。

薄手のモヘアのセーターにゆつたりしたロングスカート。スルフエイク侯爵への訪問客に対するにはややお手軽すぎるような気もしたが、冬期休暇中の一二歳の女の子の服装としては、別に問題はない。

ただ、フアーリア自身が気に入らないのは、最近になって背の伸び具合が早すぎるせいだ、手足がひどく細長く見えることだった。決して醜いということはないが、身体の幅が手足の伸び具合についていないアンバランスな感じが嫌だった。

のちの“水晶人形”クリスタル・ドール、ザ・マイシャネス・オブ・スルフエイク スルフエイク侯爵夫人のラフなスケッチという印象を与える、この時期のフアーリアだった。

「メイの時とは逆だね」

帰宅した娘に、ラルクはそう笑ったものだ。同年代の頃のメイリアは、体重の増え方が身長伸び具合を上回っていることをいつも気に

かけていたものなのだ。

構わない……ファリアの判断は素早い。父にアポイントメントを取っていない。正式の訪問客ではないのだ。侯爵家だからといって殊更に形式ばる趣味を、ラルクもファリアも持っていない。訪問客の方も、それは心得ているだろう。

「……！」

エントランスホールのコソソールを弾き、訪問者の姿をスクリーンで確認したファリアの表情が凍りついた。この少女にしては珍しいことに狼狽した手つきでドアのロックを解除する。十分開き切っていないドアを押し開けるようにして、サンダルをつっかけたなりで外へ飛び出したのだ。

「きゃー！」

とたんに悲鳴が上がる。勢いをつけすぎたファリアは、たたらを踏みながらも停まることができなかった。

「お……っと。これは失礼した」

長身の少女をがっしりと受け止めた腕の上の方から、優しい調子の声が降ってくる。慌てて身を立て直し、ファリアは目の前の男女二人……特に女性の方……を改めて凝視した。

「叔母さま！」

「ええ、マーシャ、ただいま……お兄さまはいらっしゃる？」

メイリアは弱々しいほほ笑みを姪に向けた。念入りな治療とリハビリテーションが、病後のやつれを随分快復させてはいたが、彼女がまだ完全な健康体に戻っていないのは一見して明らかだった。

「……背が伸びたわね、マーシャ。お義姉さまにそっくり」

メイリアは、姪の碧い目がすでに少し見上げなければならぬ位置にあるのに気づいて、眩しそうな表情になった。

「叔母さま……どうして？」

「スルフエイク侯爵と……きみがマーシャネス・オブ・スルフエイク

ミス・ファリア・トヒユナだと信じるのだが……きみにぜひ、もう一度会っておきたい。それが彼女の希望なのだよ」

口を挟んだ長身の青年に、返ってきたのははなはだ非友好的な視線だった。

「名乗って頂けません？そつでない、何とお呼びしたらいいのかわりませんか」

「マーシャ……どうしたの？」

メイリアが先に気づいた。久しく会っていなかったとはいえ、メイリアは、この幼い姪の気性をラルクよりもよく把握していた。

「この方はミスタ・レーフラム・トゥリユー・ネレイド。『ローナクの虐殺』のあと、わたしたちを救ってくださった方よ」

なにがなしはつとしたような表情が、蒼い光の凝ったような瞳を掠めすぎる。

「……じゃあ、レーフル・ネレイド提督は？」

「レーフル・ファウルスはわたしの弟だ、マーシャネス」

レーフラムは、僅かな戸惑いを口調に込めた。

「なぜ、ファウルスを知っているのかな？」

「だって……」

不意に悪戯っぽい微笑が、唇を淡く彩った。無邪気な、あるいは汚れを知らぬというには余りに鮮鋭な勁さを秘めた微笑。

「わたしの婚約者だから……」

戦場に立つようになってからも、それ以前、研究者として大学に籍を置いていた頃も、レーフラムは他人の言動で不意を衝かれたことは少ない。この時は、数少ない例だった。一瞬、レーフラムはファリアの言葉を理解できなかった。不意に理解が生じて、レーフラムは端正な顔をくすぶったそつに笑み崩した。無論、現在の連邦圏の情勢を考えれば、ファリアがレーフラムの弟を「婚約者」と呼ぶのは、レーフラム達にとつてはなはだ心穏やかならざるべきことではある。メル

ティア政府が、ファアリアとレーフル・ファウルス・ネレイドの婚約に反対しない意思を連邦政府に伝えたのはつい数日前。レーフラムはまだその事実を知らない。

「きみがファウルスの？」

「うん……」

「では、きみはわたしの義妹いもこということになるのかな、いずれ？」

「かも……知れませんが」

「かも知れない……か。その話を後でゆっくりと聞かせてもらいたいものだね」

「どうやってここまで入って来られたの？連邦空軍が警戒していたはずなのに」

「多少、あざといとは思ったが、策を弄させてもらった。コーラル国防軍スパイの大規模なアジトがダウンタウンで発見されたはずだ。昨日か、今日に……」

「ええ……」

「実際に侵入したのは、“反政府軍”の面々で、そのアジトと言うのも、わたしたちが作ったものだ。捜査のためにメルティア、特にドルス市内に駐留中の連邦空軍兵は残らず召集される……ドルスを騒がせたことはお詫びする。しかし、このロドニー・エリアで無用の流血を見るのも本意ではない」

非好意的なファアリアの視線に、レーフラムは、口調がやや弁解がましい響きを帯びるのを自覚した。

「シャルブック提督の名前で通過許可を要求された、と父が言っていました」

「その要請を発信したのは我々だ、マーシャネス。侯爵は許可を下さった」

「だから、こうしてメルティアにも侵入つてくるとおっしゃるの？」

「トリックめいたことをしてしまったことは重ねてお詫びしたい。どうしても、メルティアに……特に、スルフエイクを訪れたかった」

理由は二つある……言い差し、レーフラムは、微かに肩を上下させているメイリアに視線を投げた。

「ただ、マーシャネス、わたしはともかく、メイは長旅でひどく疲れている。休息を許して頂けると有り難い」

頷き、ファアリアは二人をサロンに案内する。さして広くない、おそらくは非公式な客をもてなすための瀟洒な飾り付けの部屋である。

半ばメイリアを抱き抱えるようにして一歩を踏み入れたレーフラムは、それぞれの壁をさりげなく飾っている古びたタペストリや絵画に視線を吸い寄せられた。ファアリアに促され、メイリアをソファのひとつにそつと横たえるように座らせる。ファアリアはコンソールを操作して、彼ら三人のための飲み物を取り寄せた。

「叔母さま、怪我をなさつて。放送を聞きました、わたしも……まだ、ひどいの？」

「もう、そんなでもないのよ、マーシャ。もうほとんど治っているんですもの。もう少し、治療に専念したらすつかりよくなるって……それより、マーシャ、お兄さまはいらっしゃらないの？」

「お父さまはいまおでかけ……でも、もうすぐ」

勧められるままにメイリアは飲み物を口にする。かなり強行軍の連続ワープと強引な惑星降下飛行は、彼女をひどく疲れさせていたのは事実だった。何年ぶりかで生家である侯爵邸に戻った安堵も加わり、メイリアは軽い微睡みの中に落ちこんでいく自分を感じていた。ロイヤル・ブルーの瞳を、まぶたがすつと覆った後、メイリアは水晶色の頭をレーフラムの肩にことりと預けた。

「……どうして、叔母さまは怪我をされたの？」

ひどく遠くで、澄んだ響きの声が責める調子を帯びるのが聞こえて

きた。

「わたしの責任だ」

「あなたの責任？」

「彼女を戦艦の艦橋ブリッジに伴った。考えられるかぎり、最も安全なポジションであるはずだった。実際には、わたしたちの乗っていた戦艦は味方に……」

レーフラムは苦笑というには昏過トぎる表情でファアリアに視線を送る。妥協のない、真摯な表情が、幼い日の弟トをなぜか思い浮かべた。病後のせいで頬の丸みを失っているメイリアと、ようやく少女期にはいりかけたばかりのファアリアの容貌に、レーフラムは多くの共通点を見いだすことができた。

叔母と姪とは言え、彼女たちの間には容貌の相似しか共通するものがないのではないかと……しかし、レーフラムは、そう思う。外面のよく似た二人ではあるが、彼女たち二人の歩む道はまるで異なるのではないかと？

レーフラムが非凡な知性を備えた青年であるからこそ、一見、ちよつと風変わりにはしか見えないこの少女の裡に何かしら平凡ならざるものを見いだしたといってもよい。

「味方じゃなかったたのでしょう？アリスティア・ヒューレル提督……」

レーフラムは、おやという表情になる。

「知っているのかな、何故？」

「だって……聞いたんだもの」

「聞いた？誰に？」

「レーフル・ネレイド提督に」

やや意外な感じがして、レーフラムはもう一度、この風変わりな少女を見つめる。

「ヒューレル提督は自分よりも優れた人が連邦空軍にいるのが嫌

だったんでしよう。だから、あなたを殺そうとして、結局叔母さまを巻き添えにしてしまった……でも、あなたご自身だって、ヒューレル提督が本当の味方じゃない、ううん、敵だっことを知っていたはずじゃないの。それなのに、叔母さまを同じ戦艦ふねのブリッジに連れていくなんて」

「それもファウルスから聞いたのか？」

「それくらい、聞かなくなつて分かるもの！」

ひやりとするものを、レーフラムは胸のうちに感じる。ファアリアの鋭鋒は余りにも鋭く、彼の胸を抉っている。“ミットリツフェル会戦”を計画したとき、彼はヒューレルとル・ラントのマルクを併せて屠り去るつもりで作戦を立てたのではなかったか。ヒューレルが悟っていたと否とにかかわらず、先に裏切ったのはレーフラムであり、メイリアの無残な負傷は、彼の欺瞞に対するヒューレルの報復の結果ではなかったか？ヒューレルの反撃を計算に入れず、メイリアを戦場に伴ったのは、まぎれもなくレーフラムの過ちだった。

それにしても……と、レーフラムの思いはさらに別の枝を広

げた。ファウルスからある程度の情報は聞かされているのだから、この少女の情報分析と判断力は驚くべきものだった。

「そのことに対しては一言もない」

「変わつていらつしやるのね、レーフラム・ネレイド提督」

ファアリアの口調が、と考え深げにふつと途切れる。

「わたし、恐かったの。レーフル・ネレイド大尉さん……じゃなかった、提督に初めてお会いしたとき」

「怖い？ファウルスが」

「うん。その時は静かに眠っているけれど、目を覚ましたら凄く恐ろしい猛獣のような人だつて。だから、分からなかった」

「……？」

「メイ叔母さまが、どうしてあなたのこと好きなのかって。だって、

あなたはレーフル・ネレイド提督のお兄さまなんだもの」

「わたしも恐いか？」

「分からない。戦争になれば人を殺すんでしよう？」

「……殺すとも。わたしも殺したことがある」

少女の頬が怯えに白くなるのが分かった。それまでまっすぐにレーフルを見据えていたスカイ・ブルーの瞳が初めて気弱そうに瞬きする。今はレーフルの肩に頬を預けるようにして穏やかな微笑を染しんでいるメイリアの姿を、不思議そうに見やる。まだやつれの残る頬に、しかし、幸せそうな微笑が浮かんでいるのが不思議でならないようだった。

実際、レーフルと対した時に必ず感じる何かしら禍々しいもの。眠れる銀色の巨狼の息吹に似たもの……それを、レーフルに感じとれないことで、滅多にないことだがファーリアはつろたえていた。レーフル・ファウルスなら分かるのだ。静かに眠り続けていた銀狼が炬火のような瞳を見開いたとき、その進路に立ち塞がる一切が破壊と殺戮の暴風のなかに巻き込まれ、吹き飛ばされるに違いない……と。

しかし、レーフル・ネレイドという青年は……

「連邦空軍の艦隊参謀長として何百万も殺してきたのだからね。何を言っても言い訳になるだけだと思っ。いや、そういうこと自体、言い訳にすぎない。わたしは一〇〇万人殺しました。深刻に反省していません、などと言ってみるところだね。実際に、駆逐艦なり突撃艦なりに乗り込んで自らの生死を賭けて戦う将兵たちから見れば、己れ一人、安全な旗艦のブリッジにあり、彼らの生殺与奪を一手に握っている艦隊参謀長。それが、わたしだからね。」

他にやりようがあったのかも知れない。わたしにしたところで、他に生きようがあったのかも知れないし、たぶんあったんだろうと思っ。しかし、それは言っても仕方ないことだし、もう言おうとも思わない。分かってほしいとも言わない、マーシヤネス」

優しい程の口調で話し掛けられ、ファーリアは、その碧い瞳に光を取り戻す。彼女はレーフルを完全に理解できたわけでは無論なかった。いかに聡明であっても、一二歳という年齢からは自由ではありえなかつたし、どこか基本的なメンタリティで、彼女はレーフルと食い違つものを感じていたのだから。

しかし、少なくとも理解した。メイリアはこの人を選ぶだけの十分な理由があつたのだ。自分が口出しするべきことでもない、と。

「分からない」

ファーリアはかぶりを振る。

「でも、叔母さまは幸せそう。あんなにひどい怪我をして……それに、お父さまがおつしやつてた。連邦空軍の士官生活、楽しやなかつたはずだつて。それなのに……」

水晶体の頭がくいつと持ち上げられ、それからべこり、という感じで上下に動いた。

「ネレイド提督、御免なさい……じゃなかつた、お詫びします。」

わたし、随分ひどいことを申し上げたと思ひます」

「それは構わない、マーシヤネス……むしろ、詫びなければならぬのはわたしの方だと思っ。メイ……プリンセス・メイリアには何度も救けられた。文字どおりに、生命の恩人だ。彼女がいなかつたら、わたしはここにこうしていることはできなかつたはずだ」

不思議そうな視線に気づき、レーフルは「宇宙飛行士症候群」のことを説明する。

「その病気、治らないのしょう？」

やあつてファーリアは問う。一瞬、言葉に詰まつてから、レーフルは肯定の意を示した。余りに長期の低重力、あるいは無重力生活がもたらす新陳代謝機能の異常。それによる全身衰弱。それが「宇宙飛行士症候群」だった。宇宙生活を止め、惑星上での生活に移らぬかぎり、根治はあり得ない。

「叔母さまはご存じないのでしょう、提督？」

それはメイリアへの裏切りではないか　　フェアリアは非難の響きを声に込めた。

「叔母さまは、提督一人だけを逝かせるような人じゃないんです」

「何もかも擲てるのなら、そうすると、マーシャネス……」

レーフラムは言っ。

「弁解はしない。しても、しようのないことだからね……ただ、メイは知っているよ。彼女の方がわたし自身よりもわたしの病状に関しては詳しい」

「レーフル・ネレイド提督は、提督の敵になります。兄弟なのに……」
人生の矛盾を楽しむのは文字者のみに許された特権だ……などという警句を、レーフラムはかつて聞いたことがある。それを口にするような状況でないことを、彼は心得ていた。

「きみが信じてくれるか、否かには自信がない。しかし、わたしはまだしばらくは死にたくないのだよ……そう、きみには是非、会わなければならぬと思うてきたのだ」

さり気ない動作で、レーフラムは、眠りの神の愛撫に身を委ねていたメイリアを揺り起こした。

え……？という視線を、レーフラムと姪に交互に注ぎ込むメイリアをよそに、レーフラムはやや白哲を紅潮させていた。

「きみに許可を貰おうと思ってね、マーシャネス」

「……」

スカイ・ブルーの瞳が理解の色を示すが、レーフラムには快かった。フェアリアの勘の良さは、レーフラムに弟のレーフルを連想させた。レーフルも、驚くほどに察しのよい少年だった。

その言葉を口にするのに、内心に忸怩たるものがないといえれば完全な嘘である。艦隊参謀長として数百万の生命を奪い、更に自ら揮ったトマホークに何人も敵兵の鮮血を吸わせてきたのは、レーフラム・

ネレイド自身なのである。その自分が、今、この言葉を口にする……人は非難するかも知れない。神をも恐れぬことだと。もともと、レーフラム自身、神を心に持たないし、シエルメスの市民のほとんどがそうである。

フェアリアはこくりとし、レーフラムの言葉を促すかに見えた。

レーフラムは……まだ、状況がよく飲み込めない様子のメイリアにちらりと視線を送り、そして、その言葉を口にする。

「これから先、何年になるか知らないが……きみの叔母さまを、わたしだけが独占することの許可をね」

僅かな沈黙。言葉の意味を理解したメイリアが、弾かれるようにレーフラムの顔を見上げ、そして幼い姪に視線を走らせる。血の気のなかつた青白い頬。その頬が、見る見る鮮やかな血の色に染まる。

「マーシャ……」

なにか言おうとするメイリアを、フェアリアは身振りで制止した。父のスルフエイク侯爵に驚くほどよく似た仕草だった。

組んだ手の上に、ちょっと尖り気味なおとがいを乗せたフェアリアは、悪戯っぽい目でレーフラムの漆黒の瞳を覗き込む。

「プロポーズ……ですね、提督……いいえ、ミスタ・レーフラム・ネレイド？」

「その通り」

「そういうのって、懂れます……そういう風に言われてみたいなら……って、思ったこともありますから。拒絶する権利はあるんですか、提督？」

どこかで口にした台詞だなと思ひ、唐突に思い当たる。レーフル・ファウルス・ネレイドを前にして口にした言葉。“選択の自由は？”。

「それはきみの権利だ……」

「わたしが拒んだら、提督は叔母様をメルティアに残して行かれるの？」

「いや……」

レーフラムはかぶりを振る。

「身勝手は責められていい……しかし、メイをメルティアに残していい気はない。きみがあくまでそれを拒むというのであれば、やむを得ない」

「叔母様を掠って行かれる……？」

言葉は切り、視線を巡らす。レーフラムそしてメイリアへ。悪戯っぽさは消え、真摯さが、色の淡い瞳を包む。ややあって、レーフラムはその瞳が微笑むのを見た。すらりとした姿を、すい、と翻す。驚いたメイリアが腰を浮かせる間もなく、ファイリアの長身は再び応接間に現れた。

「マーシャ、あなた……」

ファイリアは、レーフラムの手を取る。眉を上げるレーフラムの手のひらに載せたものが、鮮やかな五彩の煌めきを放った。

「……」

それが「ファイリア」と呼ばれる紫ダイヤであることを、メイリアは知っていた。もう三年前、ファイリアは、“ユラフの会戦”直前にメルティアを離れるメイリアにこの指輪を委ねた。“ミットリツフェルの会戦”の直前、メイリアは遺書めいたメッセージとともに、本来の所有者……マーシャネス・オブ・スルフエイク……に送り返した。会戦前後の混乱と思ひ合せ、無事に姪の手に戻っているとは思っていなかったメイリアである。

淡いブルーの眸に促されるままに、レーフラムはメイリアの手をとった。メイリアの指に、透き通った紫色の煌めきが宿った時、ファイリアは、不思議なほどに静まり返った表情で呟く。

「……何人も避け難き死の、二人を永遠に別つまで……」

微笑み、メイリアは言う。トゥリユー、マーシャ、ありがとう……と。そして、指輪を外した。

「でも、これはあなたのものです。マーシャネス・オブ・スルフエイク……の」

「叔母さま……」

「そういうことになると思う……マーシャ、と呼んでよいのかな？」

レーフラムが引き継いだ。

「はい」

「本意かもしれないが、きみはマーシャネス・オブ・スルフエイクでなければならぬ……そう思う。それより前に、ありがとう、と言うべきなのだと思う。余りに身勝手な願いだということは知っていた」

ファイリアは微笑いもせず、わずかにかぶりを振って、レーフラムの言葉が無用のものであることを示した。

ファイリアから来客を告げられ、ラルクは僅かな不審に眉をひそめながら応接間のドアを開いた。

「お兄さま……」

まだおぼつかない足元を踏みしめながらソファから立ち上がるメイリアに、ラルクは一瞬絶句する。“反政府軍”からの交渉申し入れ、不自然なタイミングでの“コーラル国防軍スパイ”の摘発、そしてファイリアの口調から、それを予想していいいではなかったのだが。

「メイリア……よく、無事で」

妹の腕を支える長身の青年に視線を転じる。

「レーフラム・ネレイド提督？」

「初めて……お目にかかります、侯爵」

「始めてではないな。もう何年になるか。生命の恩人を、そう簡単に忘れ去るほど、私は忘恩の徒ではないつもりです……光栄に思います、提督。そして、感謝を。よく、メイリアを……」

言いかけ、ラルクはちよつと言葉を切る。視線が流れて、メイリアの左手指で鮮やかな煌めきを放っている紫色の宝石の上に止まった。フリーリアは、“お父さまが帰って来られるまで……”と、その指輪を受け取るうとしなかったのだ。

何がなしはつとしたような表情で、ラルクは目前に立つ男女を見比べた。身振りや、腰を下ろすように勧める。

「さて、提督……」

明敏なラルクだが、この時は表現能力に一時的な不足を感じたようだった。穏やかに微笑み、言葉を促すようにレーフラムに頷いてみせる。

「侯爵……つまり……」

レーフラムの方も、もともと白哲の容貌を紅潮させたなり、口にする言葉に窮している。しばらく、頭のなかで言葉をひねくり回していたようだったが、思い切ったように口を切った。

「つまり、侯爵。侯爵の妹姫、ミス・メイリア・トヒユナを、わたしの妻とする許可を頂きたいのです……」

言い切り、ラルクの、学者的に冷徹なブルーの目を凝視する。彼の作戦指導のもとに、戦場に倒れ、倒されてきたおびただしい数の死者の群れが、ふと視界をよぎっていったような錯覚を覚えた。膨大な死者、数百万の死者の群れが、レーフラムにこの言葉を口にする機会を、随分長いこと与えなかった。いや、今ですら、彼らに対する自責の念は絶えることなくレーフラムの心を苛み、蝕んでいるのだ。

「……つまり、侯爵……ミットリツフェルで、彼女が負傷したとき……」

負傷などという生易しい怪我ではなかった。飛来した超硬質セラミックの左胸を貫かれたメイリアは、その勢いで『シグナ・フォース』号ブリッジの壁面に叩きつけられた。ばかりか、破片はそのままメイリアの身体を壁面に縫い止めてしまったのだ。メイリアが即死しな

かったのは、単なる僥倖である。

「二度と、彼女を傷つけるのは……」

さすがにレーフラムは、自分の言語能力に深刻な疑問を感じて口を閉ざす。戦略家としての天才も、将来を囑望された考古学者としての才質も、この人生の局面では全く無意味だった。

ラルクもまだ三〇代の後半。常識的な基準で言えば“青二才”の範疇にも入れられかねない年齢だったが、この時は人生の熟練者として振る舞わなければならないことを知っていた。

「……わたしが、あなたを義弟と呼ぶのはいささか気が引けるが、メイリアにとってあなたを夫と呼べるのは、最も好ましい選択でしょう。“銀河系大戦”のような不幸なできごとがなく、メイがスルフエイク侯爵家の娘で、リアー王朝の養女だったなどという複雑な境遇になければ……もっと早くにこういう形を迎えられたらうに。そのことだけがいささか残念でもなくもないが」

「それは変です、侯爵」

レーフラムは笑ってラルクの言葉を否定した。

「メイがそういう境遇になれば、大戦が起こらなければ、わたしがレーフラム・ネレイドでなければ、メイリアに出会うことも、勿論有り得なかったのです。違いますか？」

「あなたの言うとおりだ。では、生き急ぎをなさるめことをお約束願えようか、誰でもない、メイのために？」

メイリアは、澄んだロイヤル・ブルーの瞳を閃かせるように、兄と、恋人の顔を見比べる。レーフラムは、戦場の智者であっても人生の巧者でないことを改めて証明した。

「え、ええ、侯爵……」

それ以上、ラルクに返す言葉を、レーフラムは遂に見いだすことが叶わなかった。スルフエイク侯爵は頷き、フリーリアを呼んだ。興味深げにレーフラムとメイリア、そして父の顔を見比べているフリー

アを前に、ラルクは、ファーリアが与えたのと同じ言葉を、若い二人に与えた。

「……何人も避け難き死の、二人を永遠に別つまで……」

感謝の言葉を探して口こもるレーフラムは、メイリアに飛びつかれてよるめいた。危うく身体を立て直し、メイリアの華奢な身体をしっかりと抱きしめる。

「メイ……」

「有り難う、トウリユー、有り難う、お兄さま！」

何日もメルティアにとどまっている余裕は、レーフラムにはなかった。メルティアを含むエルメティア恒星区は、ナイザル・ネレイドの支配するシエルメス連邦の影響範囲にある。メルティアも、連邦空軍の布設した監視衛星の監視下にある。レーフラムのメルティア来訪は遅かれ早かれ連邦空軍……そして、レーフラムの最も恐れる敵、つまり彼の弟の知るところとなるに違いなかった。異母弟の用兵能力と、その迅さを、レーフラムは全く過小評価していなかった。メルティアに留まれるとして、最大三日というところ。この時期、レーフル・ファウルスは“ヴァーレン戦役”と呼ばれる一連の悪戦を既に戦い終えている。

「ターミア宙域を本拠地にされる……というわけですか？」

レーフラムは、招かれて夕食の席をスルフエイク侯爵父娘と伴っている。スルフエイク大陸沿岸で豊富に収穫される天然の海産物をメインにした食事は、贅を凝らしたというわけではなかったが、美味だった。

メイリアも同席したが、ただだが、まだ完全には健康を回復していない身体の方が休息を要求した。大好物のクラムチャウダーを一皿だけ口にした後、再建されてからは主人を迎え入れたことのなかった自室の寝台によこになると、ほとんどすぐにこもりと寝入ってしまった

のだ。

当然のように、ラルクは、妹の求婚者を相手に散文的極まる会話をかわしている。最初の内、ラルクは本気ともれぬ口調でレーフラムを揶揄したものである。“プリンセス・オブ・メルティア”の夫となるからには、メルティア政府はレーフラムにも爵位を授与しなければならぬ。首都タロスに隣接するサルティア公爵の血統が絶えて百年近くになるが……など。レーフラムは目を白黒させて謝絶する。自分はメルティアの貴族になるつもりはないし、自分、ラタウ・デュレインを中心としたターミア宙域を最大の根拠地にせざるを得ないはずだ。

「ええ……」

「ラタウの自治政府首席はミスタ・サミュエルソン……ごく標準的な政治家。連邦圏の辺境近くの恒星区ではよく見られるタイプの政治家でしょう」

「……野心家で貪欲だが、とかく自ら責任をとろうとしない二流レベルの政治家……という意味でしょうか？」

レーフラムの辛辣な批評を、ラルクは苦笑して受け流す。

「あなたの父上と互角にわたりあえる人物ではないのは確かですね。あなたの父上……ミスタ・ナイザル・ネレイドは確かに英雄たるべき人物です」

「確かに……」

レーフラムは否定しない。

「しかし、英雄に足る資質があるからといって、その都度、政府を篡奪されたのでは、支配されるほうがたまらない」

レーフラムは言う。ナイザルが連邦の支配権を握ったのは、彼を支持する勢力が確かに存在するからだ。

「力づくでナイザル・ネレイドを打倒することには無理があるかも知れませんが、なれば、複数の政治形態を、連邦圏に並立させておけばよいことです。選択は、連邦の市民がするでしょう。無論、ナイザル・

ネレイドが力をもって臨んでくるのであれば、こちらも力で対抗せざるを得ないでしょうが……」

「なるほど……」

ラルクはレーフラムの構想を否定しない。彼の知るかぎり、ナイザル・ネレイドは、比較的公正な施策をとっている。しかし、議会は凍結され、連邦市民の政治参加権は封じられたままである。

ナイザル・ネレイドは英雄と呼ばれるに足りる資質を持った人物である。ラルクは彼と何度も会い、そのたびに磁力めいた凄まじい雰囲気、に圧倒される思いを味わっている。それ故にこそ、ラルクは危惧する。ナイザルのような英雄が、他者の批判を完全に封じ込めた状態で全権力を掌握すればどうなるのか。英雄としての資質と、掌握した強大な権力とは、容易に化学変化を生じて専制政治と言つ名の劇業を生み出すのではないか。

複数の政治形態を並立させ、市民に選択を委ねる……それは、ル・フントのクローネス・マールクの志した政治構想と軌を一にする。無論、この時のラルクは、マールクの“新共和国”の存在を、確たる情報としては受け取っていない。

「ナイザル・ネレイドが専制君主への道を暴走したとして、武力で打倒を図るべきかどうか……」

今のところ、レーフラムはナイザル・ネレイドを直接的に打倒する意思はない。ナイザルは政治的巨人だが、軍事面で彼やマールクに拮抗する存在ではない。ナイザルには、彼を支持するいくつかの恒星区とともに、かつてのシエルメス連邦の遺産を引き継いでもらえればよい。ただ、連邦の遺産の一部が複数の政治的勢力に分割されて引き継がれても良い。レーフラムはそう思っている。

しかし、ナイザルは軍事的に恐るべき鋭利な剣を手にしている。すなわち、レーフル・ファウルス・ネレイド。彼の“ちいさなファウルス”。

「迷っておられるようだ」

「ええ……」

「連邦圏の分割を好まぬ勢力の存在をお忘れのようだ」

「シュレフ？」

「そう。シュレフ・コングロマリット」

「ファウルスの母は、シュレフ・コングロマリットの最高幹部の妹です」

連邦の“もうひとつの政府”、シュレフ・コングロマリットの支持がなければ、ナイザルといえども連邦政府を篡奪することは叶わなかったはずだ。ナイザルを支持したのは、レーフル・ファウルスの母ステイシー・ノウランの兄サイモンだろう。

「シュレフ・コングロマリットがナイザル・ネレイドを支持した所以のものは、ナイザル朝シエルメス帝国における特権的な地位……違いますか？」

「……」

「ちよつと虚を衝かれたように、レーフラムは沈黙する。」

「歴史学者として突放した立場に立つて申し上げるが、戦争とは政治の手段として行なわれるが、政治そのものは経済行為をサポートするためのものなのです。言い換えれば、戦争を起こすのは経済的な要求ということになります。やや、単純化し過ぎるかもしれませんが」

「シュレフガル・フントとの開戦を望んだ。それが、“銀河系大戦”勃発の真の理由だ？」

「最も潤ったのは軍需産業でしょう。連邦圏最大の軍需産業はいずれか。その問いに対する解答は、そのままあなたの疑問に対する解答となるでしょう」

レーフラムの視線は、政治面と軍事面には十分行き渡っていたが、経済面には及ばない部分を残している。これまで、ラルクの言うような意味で、“前期大戦”の経緯を見なおしてみたことはなかったのだ。

ラルクは更に言葉を継ぐ。ファアリアが、ちょっと怯えたような視線で父を見つめていた。

「事情は、ル・ラント共和国でも似たようなものだったかも知れませんが。もしそつだとすれば、今次大戦は両国の利害の噛み合ったところで戦われた、ということになります。両国の経済システムは、ともに軍需景気による巨大な利潤を欲していた。両国が和平を結べば、あるいはいずれか一方が完全な勝利を掴んでしまえば、巨大な利益は失われる。持久戦がならざらと何年も、何十年も続けば、膨れ上がった軍事予算は、両国の経済システムの永遠の発展を約束するだろう……と」

それは違う……思わず、レーフラムは反論する。軍事予算がシュレフに流れ込み、彼らが潤うのは構わない。しかし、戦争は無数の破壊の集積である。人命が失われ、社会のシステムは脆弱化の一途を辿る。決して、交戦国の経済システム一般にとつての利益にはならないではないか。

「……しかし、歴史はあなたに答えるでしょう」

だが“学者侯爵”の口調も思い切り辛辣だった。

「それがどつした、とね」

レーフラムはショックを受けて黙り込み、わずかにかぶりを振ってワインを口に運んだが、味も分からなかった。歴史学者としての客観性に支えられた辛辣さで、レーフラムはラルクに遥かに及ばない。

「申し訳ない、ネレイド提督……ちょっと、疲れているようです。言わでものことまで口にしてしまった」

「いえ……つまり、侯爵はおっしゃりたいのですね。シュレフの動きに気をつける……と……」

「シュレフひとつとは限りませんが、いずれにしても、メイリアを若くして未亡人にはしたくないですからね。ファアリアもいとこが欲しいでしょつ」

「侯爵……」

「今のところ、わたしにはメルティアを何とか道を踏み外さぬように進ませるだけで精一杯です。無論、ミスタ・ナイザル・ネレイドの帝国にむざと膝を屈する気にはなれませんが」

類に血の気を差し昇らせるレーフラムに、ラルクは好意的な視線を向けた。料理の最後の皿が下げられるのを確認したラルクは、ファアリアにメイリアの様子を見て来るようにと言いつける。ファアリアは少しばかり不満そつな表情になったが、素直に頷く。

「はい、お父さま」

娘のすらりとした後ろ姿を見送り、ラルクはレーフラムを居間に招いた。

「ブランドデーでも？」

「いえ、強い酒は余り……」

食事中に供されたワインだけでも、レーフラムの酒量から言えば限界に近い。ラルクは察し、自ら立って茶器を運んできた。

ラルクの淹れてくれた紅茶を謝し、レーフラムは切り出す。

「遅くとも来年中に、ナイザル・ネレイドは、コーラルに対する大規模な侵攻作戦を実施するでしょう」

“反政府軍”がナイザルの連邦政府に対して反撃を企てるのはそのタイミングになるはずだった。

「この反撃の効果は幾つか考えられますが……少なくとも、我々と連邦政府の間に講和のチャンスは生まれるはずですよ」

「その仲介をせよ、という依頼ですね」

「メルティアの好意的中立は必須です。と……って、完全に一方に片寄った仲介と見られては困る……。メイには悪いですが、あと最悪半年は待つてもらつことになります」

身勝手なことですが……眉をひそめるレーフラムに、ラルクは、しかし、頷いてみせた。少なくとも、婚約の事実だけは公表した方がよ

い。その方が、自分としても公然と仲介の意思を表示できる。言い切り、不意にラルクは人の悪い表情を作ってみせた。

「ターミア宙域における多少の利権を要求することになると思いますが」

「それは……」

「メルティア自身、ターミア宙域に利権をさして必要としない。そのようなものがあつたところで、重荷になるだけです。しかし、ミスタ・サミュエルソンやシュレフ・コングロマリットはそうは思わぬでしょう。妹可愛さ余りの身びいきとられては、わたしも動きにくい。利権など、恩を着せてラタウ・デュレーンの政治家に売り渡してやればよろしい」

ラルク・トヒユナが二心以上の優れた政治家であることを、レーフラムは既に確認していた。内政ばかりではなく、外交・経済・軍事の分野に至るまで、過不足のない広角な視野の所有者であることに疑いを入れる余地はなかった。マールクがそうであつたように、レーフラムも自らの指導者に識見に優れた政治家を戴きたかつたのである。リー・タウナーはその点、過不足のない存在だが、元大統領というだけでは地元の政治業界にはなかなか受け入れられないのだ。

ラルクは「メルティアで精一杯だ」と言う。ラルクを「反政府軍」の首班に迎え入れるのは無理と思わざるをえない。無論、その意思はなかったが。

「さて、ネレイド提督……二つまでの用件は済まされた、と思いますが」
一つはメイリアをメルティアに送り届けること、いまひとつはスルフエイク侯爵の、行政者としての手腕と識見を確認すること……

「“反政府軍”の参謀長がわざわざ危険を冒すに足りる用件といえは、それくらいかと思いますが……」

レーフラムは、香りの良い熱い紅茶を喉に滑らせる。レーフル・ファウルスとは異なり、レーフラムの味覚は、美食家と呼ばれるには繊細

さに欠けている。それでも、供された紅茶が最高級と呼ばれるに近いものであることは感じ取るに十分だった。

「もう一つある、と申し上げたら、侯爵は驚かれるでしょうか？」

「はて？」

「フー・シルUIS？……ご存じだと思いますが、かつて宇宙考古学に没頭したことがあります。挑んで、なお報いられぬ歴史上のなぞがあるとするれば、それが“フー・シルUIS？”である……と」

「我が侯爵家の始祖の素性を知りたい、とそう仰せですな」

「連邦空軍の軍人としてではなく、かつて歴史を学び、考古学を志した人間として、侯爵にはお尋ねしてみたいと思つていたことがあります」

シルUIS・トヒユナ……シエルメス連邦史上、最もなぞに満ちた個人。連邦暦五〇年代にメルティアを覆つた“メルティア動乱”のさなかに、首都タロスにふらりと現れた二〇歳になるならざる青年。僅か一〇年余りで動乱を鎮圧し、メルティア共和国を発足させたメルティア史上最大の英雄。

一旦、歴史がその名を書き記すようになって以後の活動の目覚ましが、歴史家達にシルUISの前半生に対する興味をかきたてる。しかし、数百年、数万の歴史家の挑戦にもかかわらず、シルUIS・トヒユナがタロスに現れる以前の経歴は何一つ明らかに成らない。

「提督は、何か劇的な秘密を、我が始祖に期待されているようですね」
ラルクは、ゆっくりとブランデー・グラスを傾ける。端正な容貌にとらえどころのない柔らかな微笑を浮かべ、静かにかぶりを振る。

「正統な歴史家たるもの、歴史に謎と秘密と、いわゆるロマンばかりを求めているはならぬと思うのですが……」

「シルUISは、生粋のメルティア人ではなかった……つまり、当時すでにシエルメス連邦圏を構成していたシエルメス人ではなかった。

わたしにはそうとしか、思われたいのです」

スルフエイク侯爵の韜晦を許さぬ口調で、レーフラムはずばり言い切る。プランデー・グラスを揺らめかしていた侯爵の手が一瞬止まる。「途方もないことです」

一瞬の停止がまるでなかったように、ラルクはグラスを揺らめかせ手の動きを再開した。

「ええ、途方もないことだとは知っています」

「ならば、それ以上を語るべきではない、とわたしはそう考えます、提督。始祖の素性に関する資料は、スルフエイク侯爵家にもただの一片のメモとしても存在しないのです」

「資料が常にペーパーの形で遺されている必要はありませんね、侯爵？」

「それは、その通りです」

ラルクは否定しない。

「しかし、ペーパーの形で遺されていない資料は、それを裏付ける証拠を要求します。そして、そのような証拠は連邦圏のどこにも存在しない」

「侯爵家になんらかの伝承が遺されている……そうではありませんか？」

今度のはつきりとそれと分かる間隙をおいて、グラスを遊ぶラルクの手の動きが止まった。ため息をつき、ラルクは琥珀色の香り高い酒を啜る。

「そのようなものがあれば、歴代のスルフエイク侯爵が既に発表しておることでしょう。歴史家にとって最大の喜びとは、埋もれていた歴史上の事実を、新しい角度から光を当てることで、歴史そのものを再構成することなのですからね。いえ、提督、あなたは誤解しておられるようだ。私達は、私達の始祖を知りたいがゆえに、歴代、“学者侯爵”を輩出してきた。そして、悉く報われずに終わったのです。語る

ことのできない、“禁じられた伝承”……五〇〇年にわたって侯爵家の当主にのみ伝えられた、門外不出の口伝……そのようなものは、アマチュア歴史家のいわゆる“ロマン”ではない。実際の歴史とは、散文化的事実の連なりに過ぎないのです」

「そうかも知れません……」

レーフラムは追求を諦めることにした。ラルク・トヒユナが真実を語っているのか、それとも徹して韜晦しているのか……若い彼の洞察の及ぶところでないことを悟ったのだ。彼こそが、ふらりとスルフエイク侯爵を訪ね、僅か数時間を話しただけで解けるものなら、“フー・シルウィス?”がそれほど巨大な歴史上のクエスチョン・マークになり得るはずもないではないか。ただ、衝動の赴くままに、レーフラムは言葉を継ぐ。

「発表しないままに終わった仮説があります……もう一〇年も前のことですが」

連邦空軍に入って一〇年……誰にも語ったことのない仮説

何の証拠もない……いや、何年もかけて收拾した証拠と考えるも

のは、彼が一六歳の時に起こった大学コロニーの爆発事故で失われた。それらはペーパーではなく、伝承や口伝に類するもの集積だった。爆発事故で大学のデータバンクが破壊されてしまうと、回復の見込みはなかった。

「シエルメス人の起源に関する仮説です」

「どのようなの？」

ラルクも韜晦しない。レーフラムを、若い天才戦略家としてではなく、同じ歴史に飽くなき興味を抱く若い研究者として見る表情になっていた。

「どこ……と特定はできません。しかし、シエルメス人が、少なくとも六〇〇年前には、シエルメスから数万光年離れた宙域を本拠地にしていたことは確実だと思えたのです。彼らは……おそらく、銀

河の半分を制覇した後、大規模な戦役で滅びたのだ……と。ただ、彼らの生活圏の広さから考えて、戦役後もかなりの間、少数の生き残りが各地に孤立していたことでしょう……」

「おもしい仮説だが……証拠はないでしょう?」

レーフラムは、ラルクの言葉を無視した。

「シルウイス・トヒユナは、数万光年の長征を果たした、シエルメス人の祖先の生き残りではないのか……それが、わたしの仮説の結論になるはずでした。事故でワープ航法装置が破壊され、遷光速状態となった宇宙船であれば、数千年、或いは数万年の時を経て、なお宇宙を飛び続けることができるはず。幾つか、シミュレーションを試してみましたが、銀河系の他の半円部分にシエルメス人の起源があったとすれば、この仮説は無理ではないのです」

「それは……」

冷徹な“学者侯爵”が、一瞬絶句したように見えた。

「乱暴に過ぎる」

「メルティアの一地方で、古い伝承を得ることができました。ただ一度、軍人としてではなくメルティアを訪れたおりにです。無論、古いゆえにあらゆる伝承が正しいわけではあり得ないことも心得ているつもりです。ただ、その伝承は伝えていました。シルウイス・トヒユナは失われた知識を紫の光の内に封じ込めていた……と」

ラルクは、レーフラムの言わんとするところを察したようだった。

「おもしい伝承です。私もその伝承は耳にしたこともあります。しかし、裏付けを取ることはできなかったのです……そして、紫の光……ファアリアが持っている指輪をご覧になりましたね」

「由緒のある宝石……でしょうね」

「あの宝石……紫色のダイヤがいつからスルフエイク侯爵家に伝承されているのか……第三代の侯爵ペーネル以降、あの宝石がマーシャネス・オブ・スルフエイクの象徴として、侯爵妃、もしくは侯爵の長

女に伝承されるようになったことが知られている……ご存じでしょうか」

「ええ……メルティア史の初歩のひとつですからね」

「クリスタル・ブロックを重力子コンピュータの記憶素子として利用するのは、連邦暦の一五〇年代に実用化された技術でしたからね。あの宝石が何らかの記憶素子ではないか、とも思ってみたものです」

「分析に……かけられたのですか?」

「どうして?」

ラルクは驚いたように問い返した。

「精密な鑑定に何度もかけられてきた宝石です。あの宝石を紫色に輝かせている僅かな不純物のほかは、単なる炭素の結晶でしかない。何度、鑑定にかけてみても結論は同じでした。無論、実際にコンピュータに繋いでみるという手段もあったかも知れない。しかし、数百年も伝承された古い美術品を、そのために壊してしまつわけにはいかなかったのです。外部からのいかなる刺激によっても、意味のある情報は取り出せなかった。残念ですが、提督、あなたの聞かれた伝承は、あの宝石の由来を説明するために、あとから生み出された伝説に過ぎない……わたしはそう考えます」

「しかし……」

居間のドアがノックされ、ファアリアがそつと顔を覗かせる。

「ネレイド提督?」

「何か?」

「メイ叔母さま、少し熱があるみたい。うなされていらつしやるの……ネレイド提督、薬か何か持っていらつしやいませんか?」

失礼……とラルクにことわり、レーフラムはティー・カップをソーサに戻した。

「それはいけないな。薬を預かってきている……」

負傷の後遺症で内臓の一部に炎症を起こす可能性があるから気を

つけるように、とノーラ軍医長に言われていたことをレーフラムは思い出した。夢を追ひ、ラルクとの議論を楽しんでいたかに見えるレーフラムが、紅潮した表情をにわかに青ざめさせるのに、ファériaは好意的な視線を向けたようだった。父に視線を走らせる。

「ご案内します、提督」

ラルクが頷くのを確認して、ファériaは身を翻した。

(1)

「一度、来たことがあるような気がするな……」

ロドニー・エリアの一角。さして高くない、しかし、奇妙に険しい丘陵地の中腹に、清冽な泉の湧き出す場所がある。翌日、ファériaに誘われるままに、レーフラムは意外な程の深さと面積を持つ泉のほとりに立っている。まだ緑におおわれるには時間のかかる木々を透かして、整然と立ち並ぶドルスのダウンタウンが見はるかせる。

メイリアの発熱自体はさして懸念する程のことはなかった。侯爵邸の“執事”の医療サービスは、連続的なワープの疲労と、あとは若干の精神的な興奮状態から来た発熱だと診断した。実際、レーフラムが携えてきた薬にも出番はなかった。

翌日一杯は安静が必要だ、との診断だったから、レーフラムはメイリアを連れて戻るのが諦めなければならなかった。当然のようにメイリアに付き添っていようとするレーフラムを、ファériaが連れだしたのだ。

「叔母様、叔父様を……ええと、未来の叔父様をお借りします」

「マーシャ……」

「大丈夫、わたしも婚約者のある身ですから……」

何処まで本気なのか分からない。レーフラムの左腕に両腕でぶら下がるようにしたファériaは、メイリアがこれまで見たことのない、奇妙にコケティッシュな表情を浮かべていた。

「しかし、マーシャネス……」

「マーシャよ」

「ああ、その、マーシャ……」

「お父さまがね……提督をお連れしなさいって」

「侯爵が？何処へ？」

「シルウィス・トヒユナに関わる所へ」

それがこの泉。

「別名、トヒユナの泉。シルウイス・トヒユナが初めて啓き、以後、スルフエイク侯爵家の者だけがここに立ち入りを許されています」

「わたしは、侯爵家の一員ではないが……」

「わたしがお父さまにお願いしたんです」

「ファアリアの心えが、レーフラムを驚かせた。

「理由はありません。そうしなければいけない、そんな気がしたものだから。提督、ここへいらつしやるのは初めてでしょう？」

「そのはずだ……ただ、何か……こう、一度、ここへ来たことがあるよつな……」

「メルティアには来られたことは？」

「一度。連邦暦の五六一年の……確か八月だったかな」

「わたしが生まれた年ね」

「ファアリアの誕生日は五六一年の一五月。レーフラムがドルスを訪れたとき、ファアリアはまだ母……侯妃シエリア・ハーム・トヒユナ……の胎内にあったことになる。」

「その時に？」

「いや……スルフエイクに来たときの日誌はまだ手元に残っているし……記憶を辿ってみてもロドニー・エリアに入ったという覚えはないんだが……それでも、この光景は……」

「お父さまから聞いたんですけれど、シルウイス・トヒユナは、この泉が大好きで、疲れるとここにきて休息をとったそうです。近くに、シルウイスが露営したという洞窟もあります」

「洞窟？シルウイスの「コテージ」？」

「ええ。どうしてご存知なの？」

「シルウイスの泉といい、「コテージ」という。スルフエイク侯爵家の一員であれば知らぬ者はないにしても、ドルスの一般市民はこのエリアに近づかぬ。」

「いや……そんな気がしただけだ」

束の間、何かしらとても重要な記憶が欠落しているような不安に、レーフラムは胸を嘔まれる。膝まづき、透き通った泉水に両手を差し入れる。湧き出す水は氷の歯を持つていた。

「古い、スルフエイク侯爵家に伝えられる伝承……といつても、口伝ではなくて、文書が残されているのだそうです」

ふとファアリアが憑かれたような口調になる。

「侯爵がわたしに話せとおっしゃったのか？」

「うん……」

頷き、ファアリアは言葉を継ぐ。シルウイスが、遭難し、大破した移民船の搭乗員だったと言っただけが明らかにされている。その移民船がどこから出発し、どこへ向かう予定であったのか、全く明らかにされてはいないが。歴代のスルフエイク侯爵家の当主は、シルウイスが誰か、ではなく、いずれから来たのかを明らかにするために、その歴史家としての努力の大半を注ぎ込んだのである。

「この紫ダイヤ……」

「ファアリアは右手を示してみせる。スルフエイク侯爵家に伝えられる、五彩に煌めきを放つ大粒の紫ダイヤ。先代女王ルリア・セウレリウスの養女となるまでは、メイリアの右手を飾っていたそのダイヤ。「そのダイヤが高密度記憶用のクリスタル・チップか何かだと？しかし、侯爵ははっきり否定された」

「言いさし、自分の言葉の意味に気づいて僅かに顔色を変える。」

「まさか……」

「それも分からないそつななんです……ごめんなさい」

「ファアリアは言う。」

彼女自身は無論のこと、父ラルクも、このダイヤが高密度の記憶チップどうかは知らない。歴代のスルフエイク侯爵は、懸命になって様々な推測を行い、記録を残してきた。

何代か前のスルフェイク侯爵が、好奇心にかられて、このダイアの分子構造分析を行ったことさえあった。残された記録は言つ。このダイアの結晶構造の中に、ある種の規則的な繰り返しがある、と。ただし、普通のダイアの炭素結晶の並びのバリエーションかも知れず……それが暗号だとしても、暗号を解くためのキー・ワードのかけらもない。

「……」
「お父さまはこんな風に考えてみたんだそうです」

指輪は、代々のザ・マーシャネス・オブ・スルフェイクに伝えられるしきたり。それこそ、シルウィスの代から。

ほとんどの歴史かが見落としているし、代々のスルフェイク侯爵、あるいは侯爵家出身の歴史家も無視しているのは、ザ・マーシャネス・オブ・スルフェイクの名を公式に与えられるのが侯爵妃、もしくは侯爵家の長女ということになっているのに、実際にマーシャネス・オブ・スルフェイクの称号を帯びるのは、圧倒的に侯爵家の長女が多い。これまで、約二〇人のマーシャネス・オブ・スルフェイクがいるのだが、そのうち、侯爵妃は五人に過ぎない。

「……？」

「遣伝病、知っていますよね」

「遣伝病？知っているよ」

「ええと、遣伝子のほとんどの部分が実は働いていないってことも？」

「え……それは、まあ……え？」

唐突な理解。トゥリユーは一瞬言葉を失つ。

「つまり、まさか……」

「お父さまが一〇年くらい前に考えついて……でも実証のできない仮説だったんです」

はぐらかされ、レーフラムはちょっと不愉快そつに眉を寄せる。

「ザ・マーシャネス・オブ・スルフェイクの称号を帯び得る女性は、特異な遣伝的形質を持つているのだ、とでも？まさかね……」

失笑。レーフラムは指摘する。ザ・マーシャネス・オブ・スルフェイクは、その席が欠員であれば、侯爵妃、もしくは侯爵家当主の長女が新たに称号を与えられる。その際の不文律として、侯爵家当主の長女に優先順位が与えられているに過ぎない。別に遣伝的な何かしらを検査して資格審査をするわけではないだろう……と。

「人間の遣伝子は、要するに四種類の塩基分子の無限の組み合わせ。これを四進符号と見なしたとして、十分な長さ、つまり遣伝子の構造体だが、その中に埋め込むことは既に理論的には不可能ではない。それを、侯爵家の女性達に、たとえば隔世遣伝の形で継承されるように組み込むことも、不可能とはいえない。理論上のことだけでもね。遣伝子構造の中に組み込まれるのは、さして長くもないキー・ワード：紫ダイヤに見せかけた高密度記憶チップの結晶構造の中に埋め込まれた暗号情報を解くためのキー・ワードで十分……しかし、そんな遣伝子操作が歴代……二〇代にもわたってスルフェイク侯爵家の長女に伝搬するとは思えない。突然変異や何かで情報が破壊されてしまったら……」

「特定の個人の遣伝情報を使うわけではないのだ」

割り込まれ、レーフラムは驚く。いつのまにか、ラルク・トヒユナの端正な姿が泉のほとりにあつた。

「“反政府軍”の方々が提供してくれた難問のおかげで、ここ数十日はゆっくり休ませてもらえなかった。たまには、唐突な休日もよいでしょう……ああ、メイのことは心配ない。連邦空軍には、今日と明日は州兵に警護させると通達しておいたから。メイも来たがっていたが、今日は我慢させたよ。あの娘は丈夫だからね。今日一日、ゆっくり休めば疲れもとれるはずだ」

レーフラムが呆れたことには、ラルクは簡単とはいえお茶の用意を

携えてきていたのだ。もっとも、ラルクに言わせると異例でも何でもなく、ファアリアを連れての散歩がてらのお茶は珍しくない。

「侯爵家につながる人間だけでも、過去に数百人を数えているのです、提督。その内の何人かが正確な情報を構成に伝えて行けばよい。別にそれがザ・マーシャネス・オブ・スルフェイクである必然性はない。情報が発見されず、時間の中に埋もれていくとして、それはそれでもよい……この程度の謎解きができぬのであれば、敢えて知るには及ばない……わたしがシルウィスであればそう考えるでしょう」

「……そんな」

「推測してみようと思ったことがある」

シルウィス・トヒユナは考えたのではないか。彼が、メルティアに伴い来たった科学技術は、あるいは現在の連邦ですら到達できていない水準に達したものでなかったのか。この偉大な開祖を包む伝説には、まだ仮説の域を出ていない最先端の科学技術によってしか説明し得ぬものが少なくない。シルウィスは、それらの技術が、メルティアの発展を必ずしも保証するものではないことを知っていた。だから、彼は技術情報を封じた記憶チップを“家宝”のような形で継承させるとともに、彼自身なり、彼の娘なりの遺伝子情報の中に必要な情報を埋め込んだのではないか。気づいて解読し、彼の伝えた“超科学”かあるいはメッセージを読み取れるような人物であれば、伝えられた情報を悪用することもあるまい。もし、そうでなかったとして、それはそれでしかたのないことである。

「以上が、現在。スルフェイク侯爵として“フー・シルウィス？”に心えられる全てです、レーフラム・トゥリユー・ネレイド提督。おそらく、シルウィスの直面した事故は、あなたの推測したようなものだったのでしょうか。超光速機関が破壊され、船は絶望的な相対論の檻の中に閉じこめられた。破壊され尽くした旧人類社会の唯一の希望として送り出されたシルウィス達は、しかし、使命を果たすことも叶わ

ずに、むなしく数千年の時を費やした」

「トヒユナを睨み、レーフラムはラルクの言葉を継いだ。
「辛うじて減速に成功したとき、彼らの目の前にあったのは動乱の渦中に巻き込まれた……つまり惑星統一戦争のさなかのメルティアだった……」

数千年を経てすら戦争の呪縛から抜け出せないシエルメス人類の末裔達……シルウィスと、何人生き延びたのかは知らないが彼の仲間達は戦いをやめさせ、メルティアを統一させるために全霊の努力を注ぎ込んだのだ。だが、彼らの努力は最悪の独裁政リアー王朝の誕生を助けたに終わる。

「仮説に過ぎないのだが……小説家的な想像力は刺激を受けるに十分ですね」

「証明して欲しいですよ、ネレイド提督」

「証明？」

「戦争が終わったら……」

ファアリアは言う。戦争が終われば、レーフラムが何年でもよい、メイリアとの平穏な生活を得られるとするならば、その時はメルティアに戻ってきて欲しい……と。メルティアに戻り、“フー・シルウィス”に最後の解答を与えるための調査に当たってもらえれば幸い、というのはラルクの意見である。

「タベ、ファアリアが突然に訴えたのです。ネレイド提督に、我が始祖の秘密……というほどのこともないが……とにかく秘密と呼ばれるもの全てを語って聞かせるべきだ、とね。勘のよい娘です。おそらく、あなたに我が始祖の秘密を解くべき何かしらを見いだしたのでしよう……」

ファアリアが父の顔を見上げ、それから横を向いて何事か呟くのをレーフラムは確かに目にしたと思った。硬質な唇が動いて、ある言葉を紡ぎ出したのも。ファアリアは、恐らくは彼女自身にすら無意識の

裡に咳いていたのである。“違っわ”と。もともと、その言葉の意味を、レーフラムはついに理解できなかったのだが。